明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

家庭雜誌

第貳卷

第貳號

明治三十七年二月二日發行

女は男を何と見るや（木下尚江）……一
歐洲諸國人と日本人との體格比較……四
長壽の訣……四
家庭に於ける階級制度（堺　枯川）……五
婦人と社會主義（西川光二郎）……九
樂しい生活……一四
里歸りの息女と其母（石川旭山）……一五
琴の音と小さき家……一六
苺花子と日光郎……一七
ポンチ畫（三圖）……一七
春の七草（久田二葉）……二〇
＝七草の濫觴＝家庭と自然界の智識＝
家庭料＝理及理科の參考＝七草と摘草＝
酒と人體（有田九皐）……二五
英蘭銀行の珍品……二八
新婚の姪に與ふる書（堺　枯川）……二九
家庭記者に訴ふ……三一
藤浪女と名乘らるゝ君へ……三一
編輯机上より……三二

由分社

東京市京橋區新湊町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前號の目次

夕べの家庭に輝く妻の笑顔

西洋のオバさんよりの手紙

初夢物語（小說）

お正月と子供達

婚嫁せんとする女子諸君に告ぐ

歷史ばなし（勇しい少女）

頁人への慰め（詩）

忙中閑話

結婚奇風俗

妻君の價値

辰の歲（お伽噺）

巴里の猫兒學校

娛樂と健康（家庭遊戲）

バドミントン……………デザボール

年の遊……………………福笑ひ

スクラップブック

花の課…………一家一ヶ月の平均支出額

編輯机上より

●本誌定價及廣告料

一部	一ヶ月	六ヶ月	一ヶ年	全國
金六錢	金六錢	金卅二錢	金六十錢	無逓送料

廣告料――特別一頁七圓、普通一頁五圓

注意

一、本誌は每月一回（一日）發行とす。

一、本誌の購讀料は小爲替を以て御逓送の事。
　但し郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事。

一、購讀者は住所姓名を詳細に記して申込まれたし。又轉所の際は新舊の宿所共併せて御通知あるべし。

一、爲替振込局は芝口局宛受取人は由分社宛の事。

明治三十七年二月一日印刷
明治三十七年二月二日發行

發行兼編輯人　東京府豐多摩郡千駄谷村字原宿百九十一番地　西村渚山

印刷人　東京市京橋區日吉町十番地　中村彌助

發行所　東京市京橋區新湊町一丁目十七番地　由分社

大賣捌所　上田屋　良明堂　東京堂　東海堂

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女は男を何と見るや

木下尚江

毎度婦人が友達同志で啣つ言葉に、『一體男は女を何と思つて居るのでせうねえ。』とある。私はこれを反對に題の如く飜譯した。

丁度私が二十五歳になつた春の事であつた。私はある機會からして女は『恐しいものだ。』と云ふ一個の自覺を得たのである。何故恐しいものだと心に感じたか。

其年は恰も私が辯護士の試驗に及第した矢先であつたが、或日不圖懇意な某家を訪れると、突然其家の細君なる人が、私をつかまへた。而して曰く。

『貴君、何か御おごりなさいよ。』

『どう云ふ理由があるのです？』

『大有です。ある家の娘さんがね、貴君の事をお噂して、「木下様は年も若し、奥様はまだ御有なさらない。そして大層美しい方だ。」つて。』

私は大に驚いた。兎も角細君に、

『何と貴女から仰有いましたか。』

『はい、獨身は獨身だが、其樣に美しいと云ふ程ぢやありません。とかう云つて置きましたよ。』

『それは不親切ですね。』

流石に好い心持はせぬのである。其後二三日經つて、私はまた同家へ立寄つたが、折柄髪結女が來て居る樣で、細君は鏡臺の前に座つた切り動かない。私は暫時茶の間で菓子などを投して、待つて居ると、間もなく細君は美しい頭髮をして私の前に顯はれた。

『此間の話はあの髪結女が取次いだのですよ。』

これを耳にした私は、方に愕然として色を失つた。それは、髪結女にわが素顔を見られたと云ふ虞れがあるからである。さあかうなると、此儘に打棄ては置けぬ。そして考へた。何故また私の如き醜男に對し、美

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しいと云ふ批評が女の口に上つたのか。

最も、この疑問は間もなく解けた。約言して云へば、私が其時辯護士と云ふ肩書を得るやうになつたが爲に淺墓な單純な思想を持つた娘の心は、果然私を美しい男と想像する迄に激動したのであつたらしい。成程辯護士など云ふ職業は、商賈が商賈丈に生活が華美で、醜き男も從つて小奇麗に修飾する。それ故に、心の定まらぬ少女の目には、この職業などは此上もなく有力な誘惑物の一つである。少女はかゝる立派な辯護士の苦しい內裏を知らず、只一圖に外觀の豪華、並びに生活の金持らしきに打ち込むのが常であるらしい。

私が愕然として色を失つたのは此點であつた。女は常に身の安逸ならん事を欲し、夫を選ぶ只一の標準は生涯を樂々と且つ榮耀に送らせて吳れやうと云ふ人にある。何たる利己的の動物であらう。女とはかの古への詩人が歌つたやうな、尊き天女でなければ天使でも固よりない。白粉を塗つた皮一重を剝いだならば、そこには一面利巳心の凝結したものが認められるに違ひない。當時若し私が其樣な少女を細君にしたのであつたら今頃はどうであらう。私の地位が變ると同時に彼女は倉皇として私を見棄て去つたであらう。

併し乍ら、この浮華なる婦女子の胸奥にも强き一種の力が先天的に存在して居ると云ふ事は私とても否定し得ぬ。この力や一度び發展すれば影響は實に偉大、男子はこの婦人の力に打勝つべき何物をも持つて居ない。而もその力は存外淺墓な所に顯はれる。一例を擧げて見れば、男子が其新婚前後に於ける意久地なさである。彼は身分不相應な衣服を新調する。立派な玄關を構えた家屋を借りる。華美なる裝飾品を羅列し、身邊を飾り立てる。平生無性者と呼ばれて居る男が、俄かに化粧品に憂き身を窶す優男と早變り。――これ正しく婦人の勢力の影響である。不可思議なる胸奥の力が極めて些細な點に結果を運んだ見易い例證ではあるまいか。

既に婦女子の勢力が宜く冥々の間に、强き根底を有して居る事方にかくの如くであるからには、今少し吾

く々の眼界を廣めて、其力の働き振りを觀察したならはどうであらうか。假りに一代の婦人の好尚が、翕然として役者のやうな男子に赴いたとするならば、それはもう世の中は悉く役者氣取の男子を以て滿ち渡るに違ひない。學校でも店頭でも、官廳でも街路でも、其樣な區別は少しもない。男子が社會に起つてとるべき只一の手段は、先づ身邊を修飾して役者化するにあると云ふのが、時代の男子を支配する一大原則となるであらう。又婦人の趣味が軍人に傾くやうになつたならば如何。結果は矢張同一である。社會の男性は上下の別ちなく軍人風にならう。劇場では軍人と云ふ花形の出る藝題の外これを演せす、寄席に行けば必ず軍人の話を聞く。學生の氣風性行に轍頭轍尾軍人的に變形され、常に權力と壓制とを振廻はす小軍人が出來上るであらう。

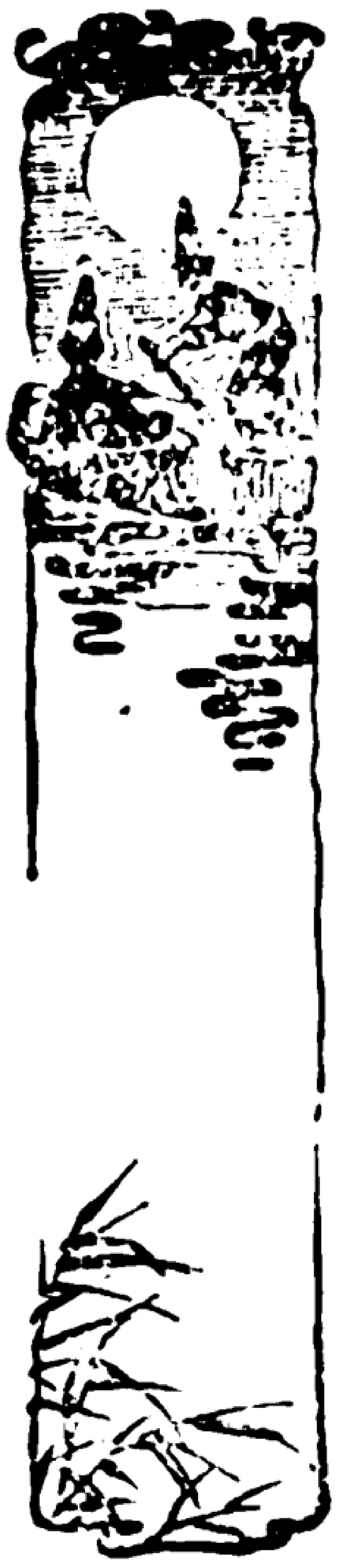
女子の勢力は底に隠れて居ても侮られぬ。彼等が一度び相通じて折柄の好尚を作るならば、優に一代の人心を左右する事が出來る、女子の力は男子の心を思ふ存分に飜弄する。併し、私はこの魔力に敬服して居るものである。男子がこの天與の魔力に支配される事を殘念とは覺えない。が、只私の望む所は其魔力を染むる色彩の如何である。力は女子の胸に常住して居る。だが其力に如何なる色彩を施すべきか。

世の所謂藝妓は、少女時代の麗しい節操を踏破られた揚句、この力を惡用して逆に出たものである。愛の色ではない。人を迷はす妖艶の魔力に外ならぬ。然らばそれに施すべき眞正の色彩と云のは何であらうか。この力を正則に働かす意義である。即ち、愛情と節操の貴さを自覺し、外來の襲撃を防いでこれを安全に保護する爲には、一命を棄てるも敢て辭せぬと云ふ大決心に到達する事である。一度びこの精神を以て男子と事をなす。婦女子の社會なりとて、何處に屈辱、壓制の聲が上らう。

終りに臨み、私が今一言述べて置きたい事は、今の家庭の欠點に就てゞある。今の多くの家庭には社會的智識が入込んで居ない。それに準じて廣い觀察眼が備

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて居らぬ。彼の現今の家庭で主なる仕事として居る大根の煮付方や魚肉の料理法、小供の育て方などが、婦人の生命問題と何等の深い關係を持つて居るか。家庭は小さき社會であつて、社會的智識なくして、眞の家庭はない。當今の家庭學は一種の臺所學である。
女の眼界を力めて狹くし、智識を淺くして何處に燃ゆるが如き愛情が湧くであらう。窓にすだれを張り、門に戸をたて、あらん限りの方法を講じて、活動界と縁を絶つ事に苦心して居る家庭の臺所では、抑も何事を日毎の仕事として居るのであるか。
惟ふに、眞の愛情の花が婦人の胸に咲く時があるあれば、それは云ふ迄もなく世界の大局に眼を放ち、地上の人類皆な同胞てふ大意味を自覺した瞬間であらねばならぬ。(講演摘要)



歐洲諸國人と日本人との體格比較

身長平均

男、五尺五寸四分(歐洲人)　女、五尺二寸一分(歐洲人)
男、五尺二寸五分(日本人)　女、四尺八寸四分(日本人)

體量平均

男、十七貫三百目(歐洲人)　女、十五貫六百目(歐洲人)
男、十五貫目　(日本人)　女、十三貫目　(日本人)

運動と食料改善とは教育者の一日も忘るべからざるの問題である。

長壽之訣

英國有名の醫師シエムソーャ氏は長壽の秘訣十八ヶ條をあげ、人若しこれを守らば百年の壽を得ること疑ひなく、萬一この十八ヶ條を遵守して其壽に達せずして死すものあらば、それこそ却つて不思議のことなりと云つて居る。吾人は無闇に長壽せん事をのみ望む譯にはあらざるも、又參考の料にもなるであらうと思つた故こゝに掲ぐ。

一、八時間正しく就眠すること。　二、體軀の右側を下にして眠ること。　三、終夜寢室を開放し置くこと。　四、寢室の戸の代りに薄き幕を下ぐること。　五、寢臺を壁に向けざること。　六、朝入浴せざること。　七、朝飯後運動をなすべきこと。　八、肉類を少しく食すること、但し調理に注意すべし。　九、成人ののち牛乳を呑まざること。　十、身體の細胞を養ふために脂肪多き滋養品を多食すること。　十一、亂酔を避くること、亂酔は身體の細胞を害す。　十二、獸類を居間に入れざること。　十三、成るべく田舍住ひをなすべきこと。　十四、飲用水に注意すること。　十五、職業を轉じ身體の疲勞を補ふこと。　十六、少時つゝ屢休息すること。　十七、功名心を制すること。　十八、虚心平氣にて怒らざること。

家庭に於ける階級制度

堺　枯川

私は現今の家庭に於て三種の階級制度の行はれて居る事を認める。第一は『夫婦間』第二は『親子の間』第三は『家族と其雇人との間』これである。私は先づ第一の階級制度に就いて少しく陳述しやうと思ふ。

今日の夫婦は互に何と呼んで居るだらう。妻の『もしあなた』に對して、夫の『おい！』これが大抵の家庭を通じた呼聲である。併しこれは漢學流に云へば、『夫唱へ婦隨ふ』で、敢て不思議とはせず、女もそれで滿足して居る。最も年の若い智識の進んだ婦人の中には折々反抗心の強い人が顯はれ『世の中に女程損な者はない！』と云つて男子から受けて居る此重い壓迫をば必死に取除かうとするけれど、久しきに亘つた積弊の悲しさには、終に何等の効をも奏せずに、泣寢入りとなるのが其結果であつた。やがて、それが人の妻となり、生涯の經驗を充分に積んだ後の日、自分の娘を諭す言葉に曰く、『兎角女とはこうしたもの。何と云ても仕樣がない』若し又娘が其嫁入先から、何か苦狀を持込んで歸つてゞも來たならば、母親は只一言かう云つて頭から諦めさせる。『汝は女だもの。男に從つて行くのが本當です。』かくして幾時代となく經過する内には、此不公平なる階級的思想が何時か普通の思想となり、兎も角表面丈でも平和と云ふものが保てゝ來たのである。併し乍ら、かゝる不健全な思想が何時迄其生命を保持して行く事が出來やうぞ。現に女子教育が盛になつて、これ迄女子の頭上に掛つて居た壓迫が、明に認められた今日、一大改革の急務である事は管々しく說明する迄もないであらう。

今假りに今日の男女が結婚せんとする其事情動機なるものを吟味して見やう。まづ男子の方から云へば、年頃で、生活に餘裕が出來た、即ち其人がある職業に就き、今後は獨立して生計を營んで行く事が出來る――からである。それ故、細君を貰はう、若しくは妻を取らうと云ふ。だが私はこの貰はう、取らうが氣に食は

ぬ。何故なれば、其人は生きたる一個の女子を捕へて、恰も臺所道具でゞもあるやうに思つて居る。そして、如何にも一人の女子を自己の所有にしやうと云ふ意味が、其言外に顯はれて居る。譬へば、臺所に据付ける爲に火鉢を買求める時のやうな氣味で以て妻を迎へやうとする。又女子の側から云へば、もう年頃にもなると、『早く片付きたいものだ。』と云つて、日々美粧して能き相手を待つて居る。私はこの片付きたいと云ふ文句が氣に食はぬ。或はお嫁に行く――何となく其處に賣られて行くと云ふやうな意味が籠つて居るげに見えるのである

尙は一歩進めて云はう。譬へばこゝに獨身男子が一人あると假定する。友人曰く、『君、細君を貰はぬか。』そこで獨身生の答へは大方かうである。『さうだねえ。別嬪かね？』更にまたある家に一女あり、媒介人曰く、『好い口が御座います。』そこで其父親の答へは大抵かうである。『其人の月給は幾何程かね？』

此樣な調子で男子は自分の慰めの爲に妻を娶る。そして女子はその男子に養はれんが爲に結婚すると云ふのが、現今の若き男女の常態である。私はかゝる結婚の中に眞の愛情の存在を認める事が出來ぬ。この男子は女を養ふ人であつて、この女子は男に仕へる人である。今日の結婚事情と云ふもの、概ね斯くの如し。

私はかくも薄弱な根底の上に築上げられた夫婦が、後日に至つて往々離婚の不幸を見る事は、左程に不思議な事でないと思ふ。其場合、夫なる人の言分を聞くと、『今から出て行け！』である。だが、それも其筈であらうか。その夫は固より自分の慰めの爲に貰つたので實は養つて居ると云つてもよい。それ故厭になつたら出て行けとも云ひかねぬであらう。けれど、妻の身になるとさうは行かぬ。彼女の抑も妻となつた事情と云ふのが生活の地位を求めんか爲め、即ちある男子に仕へて、養うて貰ふ爲であつたのだから、この地位を捨てるのは命を捨てるのと餘りに大した變りでない。『只一言の『さあ出て行け。』位で、どうして輕しく出て行けやう。然り、決して出て行けぬ。出て行けぬ代りに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

終に又一層の壓制に服從せねばならぬのである。

實に悲慘なるは女子の運命である。そして、この所謂運命の依て來る根源は何處であらう。それは申す迄もなく生活問題である。衣食問題、金錢問題、これを措て外にはない。然らば、これ等の不運薄命の女子の爲に、光明の途を開くべき策如何。改革の方法はないであらうか。曰くあり！　社會制度――經濟制度の革新これである。

我が日本とても昔時は人々別々に住んで居た。そして、衣食住皆な自分一人で工夫し、且つ集めて居た。然るに、月日の經つに從ひ、段々と人數がふへて來る。すると、其内の一人は衣服を造へる事にのみ骨を折る。又他の一人は米を作る。更に又他の一人は專門に家を建てる事になる。と云つたやうに、分業と云ふ便利な方法が、初めてこゝに行はれる機會が出來たのである。それと同時に、一方では夫婦と云ふものが成立ち、男一人と女一人が寄つて家を爲す。夫は公の爲に特殊の才能の發揮し、妻は又新しい次の時代を作る爲に、子孫を養育する、即ちこれにも分業の法が行はれて居るのであつたが、併しそこには決して貴賤と云ふ隔てがなかつた。人間と人間とを區別する貧富と云ふものもなかつた。人類は眞に平等無差別の境にあつたのである。然るに、この分業が久しく續いて居る内に、何日か或者が土地の一箇所を占有したり金錢を一個人で澤山に私したり、又或事情の爲に貴族などゝ云ふ階級が顯れ出るやうにさへなつた。そして、夫婦の間にも段々と此空氣が浸入して來て、終には拔くべからざる惡習慣を形造るやうな次第となつたのである。

こゝで前段に戻る。吾々は何を稱へるか。それは別に奇妙なのではない。吾々は今の社會を一番最初に顯はれた社會の如く改造し、土地を共有にして、平等に衣食住を分配しやうと云ふに過ぎぬ。さうなると、貴族、平民、雇主、被雇人、そんなものは一つもない。男子が職業を求めるにしても、それは單に生活の道を得んが爲に求めるのではなくして、各自天賦の才能を圓滿に發揮する爲に職に就くと云ふ事になる。當の上

手な人は畫家、力の强いものは力仕事。而も職業に甲乙があるのではない。

　これを婦人にあてはめるに、婦人は何も生活の爲に嫁に行くのではない。婦人は愛の爲に結婚する。子孫を養育して、次の時代を作る爲に結婚するのである。さて、さうなれば、夫を選ぶに其男の月給を聞かすとも好い。自ら進んで滿足して夫婦となる事が出來るであらう。

　これを約言するに、今日の結婚では、その美しい結納の中にも、矢張女を買ふと云ふ意味がある。立派な嫁入の道具の中にも、又何處かに賣られて行くと云ふ意味がある。從つて、男子は女子に貞操を責めるが、女子は男子に貞操を責めぬ、何故かと云へば、男子にとつては、他の諸道具と同樣、女子はこれ一個の所有物であるから、それを取られる塲合には叫ばざるを得ない。畢竟男子は女子を一個の私有財産として看做して居るのである。これに反して、女子は雇はれて養はれて居るものだから、固より男子は自分の私有財産でない。操を責めぬと云ふ理由は蓋しこゝらに伏在して居るのであらう。

　當今の小說家が好んで筆をとる女子の薄運、若くば墮落と云ふもの、これを世間の道德家に云はせれば不道德の極と正面から宣言する。或者は曰く、『親が惡い』又或者は曰く『女子には移り氣がある故。』と。併し乍ら、私はこの三つの見解の何れにも服する事が出來ぬ。私はこれを現社會の惡制度に罪を負はせる。今の社會の女には輕薄ならざらんと欲するも得ない。親も惡くなし。神聖なる戀愛と云ふものが、今日の社會に實現し得る理由は一つもない。

　今後の女子は大々的自覺の境地に迄進まねばならぬ。婦人は決してかゝる不完全な社會に滿足すべきでないと云ふ自覺と、『女だから仕樣がない』なぞの觀念は大なる誤解であつたと云ふ自覺。並びに、女子は男子と共にこの社會を根本的に改良せねばならぬ。と云ふ健げなる自覺の域に達して欲しいのである。

（講演摘要）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人と社會主義

西川光二郎

婦人に社會主義――何故に必要であらうか。先づ貧亡人の娘を見玉へ。生れ乍らに生活の苦痛を味ひ、其口を支へる爲めには、各自に種々雜多の職業を覓めて行かねばならぬ、職業とは何であらう、小間使、女中奉公、乃至は藝妓娼妓、世人はこの藝妓や娼妓を見て一概に賤しきものと呼び、常に一種の輕蔑心を以て迎へて居るが、余はこれに全然同意する事が出來ぬ、何となれば彼等は貧窮の境地にあり、萬やむを得ぬ壓迫に強制されて、かゝる運命に落ち行くものである。

若し彼等にして生活に困らぬ人であつたならば、何しに好んでかゝる死地に陷らうや、貧亡人の娘達は家で安樂に兩親の脛をかじつては居られぬ。生命が惜しいならば、厭が應でも他の餘裕ある家に雇はれて、生活の場所を見出さねばならぬ、然るに、彼等の雇主なる富者は、如何に彼等を冷酷無殘に取扱ふであらう。雇主は一般に被雇人を玩弄物視し、強き光りを有する金權と云ふもので、弱き女の操をさへけがすのである。偶には其娘の父親なるものが、雇主に向つて苦情を申込む場合があるとしても、彼は例の金權を利用して、或時は三百代言を雇入れ、或時は反對に恐喝等の方法を以て、到頭泣寢入りに父親の口を噤ませて了ふ。何たる悲慘な現象であらうか。

併し乍ら、これ決して珍奇とすべき事實なのではなく、社會を通じた一體の病所である。惡思想の結晶したものである。されば、富家の主人が美しい被雇人の節操をけがしても、敢て大なる罪惡とも思はねば、又恐しいとも考へぬ。即ち――社會一般にそれが習癖となつて形造られて居るからであらう。富家の主人は曰く、

『貧亡人の娘は金で買へる。』と。

女子はそれ〴〵獨立の職業に就くのは、口を糊すると云ふ動機に出るのが本來であるのに、終にはそれが意外の累をなして貴き操を破らねばならぬやうな仕儀

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

になる、蓋し男子が生活をせねばならぬ爲には、富者に其頭を下げる事を敢て辭せぬが如く、貧家の女子が生命をつなぐ爲には、富者と云ふ惡魔が來るが儘に任して天與の節操を蹂躙せしめねばならぬ。特に此等の婦女子中最も不幸なるものは、工女の身の上である、西洋でも工女の百中九十九迄は矢張操を全うし得ず、若し又稀にそれを保持して行かうと云ふ凛々しい決心のあるものは、是非共懷中に一挺のピストルを用意して居らねばならぬとの話。余が知人の所説を聞くに、現今我國の工女仲間は、大抵かの募集員なる惡徒の爲に無垢の身を瀆され、又幸にしてこの惡魔の毒手を免かれたものは、工場の事務員若くは書記等の輩に魅せられて、終に拭ふべからざる汚辱を受ける事が往々であると。現にモスリンや鐘ケ淵紡績の工女が、悲しむべき運命の渦中に捲込れた話は新聞で常々散見しつゝある所。彼等が國元を出發する時には、如何に美しい理想を以て希望の光を彩つて居たか。何ぞ知らむ、彼等が戀々たるの我家を見棄た瞬間が、既にもう恐ろしき地獄の門に向つて踏出した其第一歩であつた事。爾來幾年かの年季を經て、懷中には一文の錢も殘されては居らぬ、其上清淨なる少女の精神は何れにか失せて、肉體は早や明かに汚點を以て蔽はれた。故郷へ歸らんか、其旅費さへも心に任かせぬ。と云つて乞食にもなれぬ。あゝ、此等の婦女子が必然に落ちて行く境地は何れであらう。——賣淫婦、これである。偶には歸國する丈の便宜を得るものがあつたにしても、それは最早著しく害つた健康と腐敗した精神とを土產にした好ましからぬ女であらう。一村の青年は彼女の爲に忽ち純撲の精神から離れ、懦弱淫靡の氣風に惡感化されぬとも限るまい。曾ては相當の結婚費と、其對手とを得やうと云ふ志から出た都上ぼり、何たる甚だしい墮落であらう。トルストイ曰く。一男あり、彼一人の女子を墮落せしめれば、彼女は更に百人の男子に墮落の道を敎へると。然らば其所謂一男とは誰であらう。金權を亂用する惡き男子である。若くは偏頗なる金權の社會である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

氏なくして乘る玉の輿——これは結婚の眞意を發揮したものでは固よりない。併し、今の社會では金のある方で女を賣ふと云ふ觀念を始終持つて居る。女を貰ふのではない、買ふのである。曾て貴族の令夫人であつた一婦人は、現今哀れなる淫賣婦となり巡査の手帳に其名を控へられたこと、既に十有數回に及んで居ると云ふ話がある。又かの教授横山某の妻、あれは素とある下宿屋の女中であつた。この二つの例は共に結婚の眞意を解せずして、輕卒なる行動に出でた爲めの必然の結果である。男は金のあるに任せて、顏が好いから貰ふ——如何に其心底の醜劣なるよ。金滿家乃至は貴族の悴と勞働者の娘との結婚、世にこれより危險なるが又とあらうか。

然らば假りに理想的の結婚と云ふものがあるなれば勞働者仲間の結婚に於いて見る事が出來るのであらうか。余はこの問題を解決するに當つて、まづ述へて置きたい一つの話がある、信州は筑摩川の畔に、日雇稼ぎの夫婦が一組赤兒と共に住んで居た。所が長い間の不景氣續きで、雇者はなくなる米は高くなる。其結果北海道へ出稼ぎに行つて仕舞つた。三月經ち半年經ち女房は頻りに首を延して夫の送金を待つて居たが、どうした事やら終に一文も手に入らぬ。其内に糊口の道が殆んど絶えんとする。引換えて夫の方では、優しき女房の心根を推察せぬではないけれど、實際豫期したやうに金が儲からぬから仕樣がない。そこで女房は思つた。若しこの赤兒がなかつたら、妾一人で何うにかして食べて行けやうに。と、一念凝固つた揚句は、到頭其愛兒は、河中に投すると云ふ太膽な心になつた。無論彼女は殺人罪に問はれて刑に服したと聞くが、實に勞働者の妻は禍なるかな。勞働者同志の夫婦は理想的であるけれど生活の資を得んが爲に、かゝる悲慘なる事件を演出させざるを得ないと云ふ社會は、決して感心の出來ぬ社會である。

抑も今日の社會は貴族と金持と地主との社會であつて、人類の共有的と云ふ恩澤に聊かも浴して居らぬ。されば、貧亡人の家に生れた男子にとつて、社會主義

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が必要であると同時に、貧亡人の娘にとつても又甚だ其必要を認めるのである。必要は併し只これのみに限られぬ、私は中流以上の女子にも社會主義の必要を絶叫したい。成程金のある家の娘は、他人の家へ小間使に住み込んだり、女中に雇はれたりするには及ばぬであらう。結婚をする迄は親の厄介になり、何不足なく安樂に暮して行けると云ふ丈は事實に違ひない。併し乍ら、今日の如き不完全な社會で、どうして眞の理想的結婚を實現する餘地があらうか。こゝに一人、道徳の高い智識の進んだお孃さんがあるものと假定し玉へ。この人が愈結婚せんとする場合に、果して何人を自分の夫とする事に同意するか。軍人――軍人は固より活潑で華やかな生涯を送る人であらう。併し乍ら、彼のする仕業は一体何か。彼は日々鐵砲を掃除し、劍を光らせて人殺しの稽古をして居る。思想の高貴な令孃の身分で、これ程道徳の卑い軍人などに、どうして結婚を申込む勇氣があらう。高利貸――高利貸の妻、これは金がある。美衣美食、榮耀榮華は云ふ迄もなく自分の云ふが儘に運ぶであらう。併し乍ら、高利貸の及ぼす社會全体の惡結果に目を付けよ。令孃にはかゝる人種と一生を契る程の太膽は決してない。地主の妻――これも金がある。芝居、避寒、避暑、流行の衣裝、指環、何一つ我物となし得られぬ譯はない。遊山も思ふ存分である。併し乍ら、外觀皮相と云ふ事の外に、今少し高い見地を有して居る令孃には、かゝる物質的の快樂が畢竟何程の價値をもたらすのであらうか。一体この土地とは何であるか。土地は上帝から人類一般に賦與せられたもので、此土地は誰々の所有であるなどとは初めから定まつて居なかつた。然るに、今日我日本に於て見聞しつゝある慘狀は如何。東京市のある片隅の共同長屋では、疊三枚に七人の家族が群居して居る。又他の場末に建つてあるボール長屋(壁の代りに周圍を紙で張付けた家)では疊三枚に九人の家内が起臥をして居る。かばかり廣い土地を持つて居る日本國が、何故に斯樣な不公平な處置を敢てして置くのであらう。富家の主人が一双の眼を娛ましめる爲には、

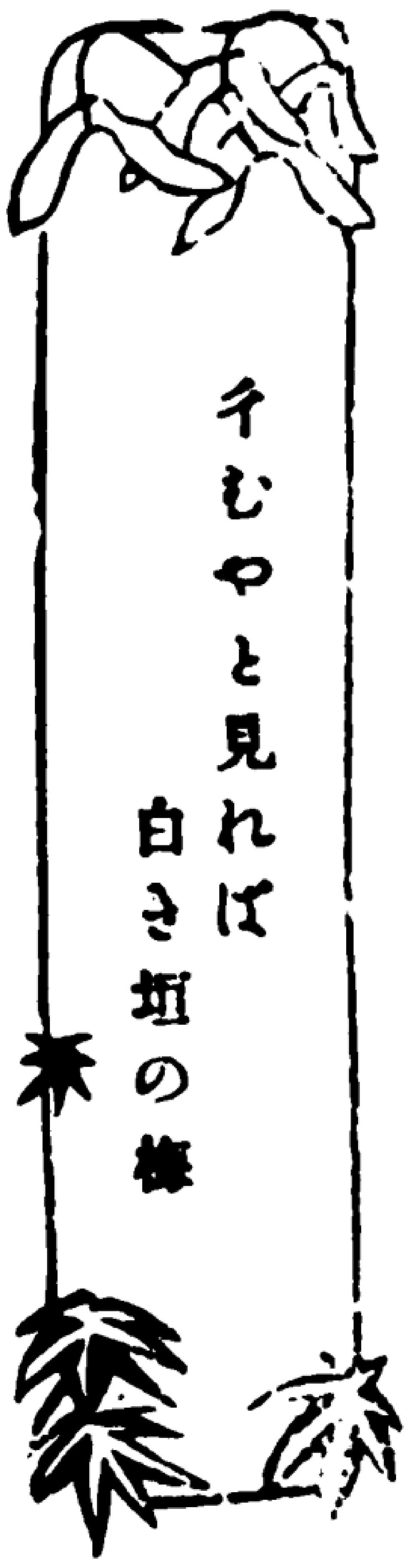
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

市の大公園よりも廣くして立派な庭園を獨占して居るさへあるではないか。地主制度の弊害は、實に量るべからざる程の極點に迄達して居る。勿論昔時の如き仕民の少數な時代にあつては、左程の弊害を見る事なしに濟んで來たが、民族勃興の當代に方ては、決してかゝる惡制度の存在を許して置くべきでない。

さて、株持――何々の株券、何々の新株、家には株券の山を積込んだ紳商、その細君となつたならば、一生は無論安樂に暮らせるには違ひない。併し乍ら、澤山な利子や配當は決して株券其物が產むのではない。實は其株券の下で泣いて居る女工の涙と血と汗とが、それを產むのである。深き同情心に富んだ令孃ともあらう人が、何故こんな紳商の妻となる事に肯じやう。辯護士――貧亡人の爲に竭さうと公言しし居る辯護士の生活は、如何にも派出で應揚である。從つて普通人の生活費では到底その嚴しい玄關を維持する事は出來ぬ。維持が出來ねば十度に一度は金持の肩を持つ、終には二度となり、三度となり、華美なる生活の奴隷となつて、知らず／＼本心に背くと云ふやうな結果になるのが今日の狀態である、賢明にして貞淑なる令孃はかゝる意氣地なき辯護士を思つて、何時迄其外觀に迷はされて居やう。

こゝに於て、女子は大に考慮を費さねばならぬ。一體、個人々々として見れば、人は決して鬼でもなければ蛇でもない。併し、前述の如くかへす／＼も社會制度の惡い爲、職業に就く事が却て不道德を行ふ事になるのである。

この惡社會、一日も早く改造せねばならぬ。飯を食ふ爲に働かねばならぬと云ふ社會を改造したい。男子が自己の職業の爲に罪惡を犯すと云ふ心配がなくなつたならば、其妻たるもの丶幸福果していか斗。余は繰返して云ふが、今日の女子が一般に社會主義の眞味を解し、且其必要を心に記してもらいたい。（講演摘要）



樂しい生活

自分は家庭雜誌を讀んで常に世の眞家庭の話を聞き愉快に堪へぬ。で聊か自慢らしいが自分の家庭は慥に樂しいと思ふから樂しい生活と銘打つて一つ御話しよー。先づ我が家の位置は尾道の向の島の北岸で、市へは海上二町餘の渡しを隔てヽ半里とはない。家族は母親(四十九歳)自分(二十五歳)妻(二十二歳)悴牛太(三歳)下男源吉(十七歳)の五人で、外に十四羽の鷄と二疋の三毛猫とが居る。母親は二十四歳の時生後百二十日の自分と、五歳になる自分の姉とを連れて、夫即ち吾が父に死なれた。後二年で天は此憐むべき寡婦の懷から更に姉を奪つた。意志の強い母はそれにも屈せず、分家の叔父即ち父の弟の監督の下に遺產を保つて郷村の役用から神社佛閣の寄附に至る迄敢て人後に落ちるよーな事なく、勤儉力行して自分には中等教育を授けて吳れた。自分は明治三十年九月尾道女子高等小學校に第一學年の受持教師となつた。三十四年春三月、母が多年の望みであつた妻も迎へたが姑と嫁との氣が誠によく合ふ。其翌年には孫、それも丈夫な男の子、おまけに成長するに從つてオバーチヤンを慕ふといふので堪らない、誰に向つても「若い時の苦勞は年取つてからの幸福で。」との說敎だ。小供が居るのに家が賑しいから一日大方笑つて居る。近所でも「岡田は平和な家じや」と羨まれて見ると、勢ひこんな話がして見たくなる譯だ。朝自分が學校に行く時、牛太はオバーチヤンに負はれて下の十字道迄御見送り、毎日の事に從いて行くといつては泣くのである。これから殘る三人は代り〴〵の傅で晝が來ると極々質素な菜で中食を濟す。これは自分が學校で辨當飯を食つて居る時御馳走は食べないとの母親の趣意で大に尊い。自分が學校から歸ると牛太は手をついて御辭儀する。そしてテッテン〳〵と言つて大騷ぎをやる。間もなく夕飯で、此夕飯并に其後が最も樂しい時なのである。母親は御膳の蓋を取ると刺身がある。此の不意の御馳走で母を喜ばすのが妻の最も得意な點である。此時學校や家であつたことを互に語りあふ。食後の休憩には牛太が梯子段の臺に上り、手を振り眼を瞋らして演說の眞似をする。又惡い事をして**オトウサン**に叱られた時や、**オカーサン**につめられた時や、自分の泣く時の眞似や、それに**オバーチヤン**に頭を撫て貰ふ時の模樣迄悉く一人で眞似る。其他種々雜多の藝當で家内一同抱腹絕倒といふ有樣である。牛太が寢ると各夜業につく。母と妻とは針仕事、下男は藁仕事、自分は學校の用が無い時は新聞雜誌の朗讀をして聞かすのである。九時半には夜業を納めて妻と下男との勉學を初めるので、それにはチヤンと時間割がしてある。茲で一つ斷つて置かなければならぬのは下男の源吉である。渠は尋常小學を卒業したきりであるが、學校で習つた事を忘れて居ない事は實に妙である。そして其勉學に熱心な事は感服の外はない。夜々學問をさして貰ふといふので休み日などでも牛太の傅をして吳れる事が多い。皆が勉學にかヽると母親は小說を持つて床にはいるが、十時半勉學を終へて自分が「御休みなさい。」といふ時は眼鏡をかけて小說を持つた儘寢入つて居る。此時妻は小使帳を、下男は鷄日記を出して各記入して居る。鷄日記といへば大層らしいが、手帳の使ひ古しをやつて、餌の仕入と產卵額を記入さす迄の事。尤も鷄は一切下男に任してあるので、渠は責任を以て飼養しつヽある。前記の勉學は昨年九月から初めて今に續けて居るが、祭日日曜は休みで、妻は此時琴の復習、下男は已の好きな小細工をする例である。

以上の外に我が家の樂みは生徒の來訪である。彼女等は卅三年以來自分の受持で今は四學年になつた。其多くは度々遊びに來るから家族の者とは心易い。遊びにでも來た時折惡しく來客抔あると母や妻の所で遊ぶ此樣な時には我家は實に一個の樂園の如く思はれる。(備後、岡田竹郎)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

里歸りの

息女と其母

石川旭山

嫁に行きし息女が久しぶりで生家へ歸り、先づ我が喜ぶべきこと、悲しむ可きことを談りて、喜憂を分ちたいと思ふのは其母である。亦嫁に遣りし其息女の狀況を、最も懸念して聞かましと思ふも其母である。母の膝下を去りて他家に嫁ぎ、其身漸く浮世の風に曝さるゝに至りし息女と其母との間なれば是も強き人情の發作があるのは當然のこと。從つて玆に人道の最も深き意義が味はるゝことと思ふ。

「マー久しぶりて、善ふ來て呉れました。オ、孫か、見違へる程大きく成つた。ナニ婿殿も非常な御出世とな。それに皆樣も至つて御無事の御樣子、ナント芽出度い、嬉しいことだろう」と女が父なる夫にも告げ、兄弟なる子供等をも喚び、相共に喜び祝ふ。人生の幸福是れより大なるは無く、人情の眞趣の甚だ深きを見るのである。

之に引き換へ、姻家の舅姑に邪見なのがあり、婿殿は身持が惡るく、其上吾が女を冷遇し、漸く產れた初の孫さへ病身なりと、涙ながら最愛の女が談るを聞かば如何に。「ホンニマー何といふ不幸せの子だらう」今日は汝獨りを泣かしては置きません、私も一所に泣きます。サー泣きませう、涙の有る限り」と、積り積つた胸中の憂さ悲さを、二人が涙で解かして洗ふて遣りたいと思ふが母の至情であらう。人情の趣味は又前よりも遙かに深きを覺ゆるのである、

人情の眞趣は盡されて居らう。母子の情は至れるのであらう。されど予をして蜀を望ましめよ、予は敢へて特に息女たる人の爲めに言はねばならぬ。何ぞや。其母に賴り、母と共に喜び悲む如く、母よりも高く、母より大なる、母よりも永遠なる者に賴ることが出來たら實に無上の幸福であらうと言ふことである。

常無きは人の身よ。賴りに賴りし慈愛深き母御も、何時夜嵐の吹き折くかも知れぬ。其時は如何にすべきぞ。よし健在すとも不幸にして其母邪見の方にて同情を得ることが出來ぬ時は如何に。已れ仕合せ善き時はよ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれど、前に言ふた様な悲ひ時は如何に。胸中の苦悶は誰に訴へ、誰と共に悲み、誰に依つて慰安を得べきぞ、於是乎、世には病を得て床に臥すに至る人がある、心狂ふて益に立たぬ人となるのがある、甚だしきは、淵川に身を投じて死ぬ人さへある、悲惨の極ではないか。忌はしの至りでないか。

此の悲惨を避けて、如何なる苦悶の中にも慰安を得暗黒の中にも光明を得たいと言ふのは人の衷情であらう。予は此衷情の満足を得んことを望む者である。

若し絶對に高く、永遠に限り無き處に光明と慰安とを得て而して其れが我が力となつて現はるゝ時は、それこそ如何なる不幸、如何なる困難に遭遇ふても、怯るまず、撓まず、遂には之に勝つ事が出來る。自ら家庭を造りて其主婦となり、身の境遇も漸く複雑になりし者は此に至つて初めて能く其責務を盡すに足るの根底を得たと言ふ可きである。又は母と共に悲むにしても、かくてこそ母子の涙も苟且ならぬものとなりて、眞に胸の底迄を洗ふことが出來るであらう。

琴の音と小き家

正月七草の日、夜の九時頃、赤阪の方から來て麻布笄川べりに通りかゝつた。丁度定席の前へ出ると、かすかに琴の音が聞える。立寄つて見ると瓦斯燈に河野と印して有つた。好な事とて寒を忘て暫時佇み面白く聞きながら、密に家の外觀を見た處、二間三間位の小き家で、勿論立派の家では無い。然るに、或感が起た。夫は奥床しく思つた。折柄油が盡たせいか、瓦斯燈が消える。間も無く曲も終つた。其處で醉狂では有たが、余は家に歸り、一枚のはがきに左の如き賞賛の辭なつられて、ポストになげた。

今夜お門の前を通りました處、琴に三味線の合奏が聞え、間々に女の聲と少女の愛らしき謡聲とが榾を傳つて聞へました。何の曲だか分らぬが、好な事とて少時佇み、寒を忘れ面白く拜聽して居ました。そして愉快の間に一種の感がムラ〱と湧ました。夫は他人が混て居るか知ぬが、此一家は平常和氣靄靆たる温たかき家庭と思ました。夫は主夫婦共に一日の神聖なる勞を終り、一家擧て樂むと云ふは家庭の美風で有ると思ひ、實に羨望にたへせまんでした。新玉の年よりも此方が實に目出たいのです。曲が終りましたから、余は拍手を爲よーと思ひましたが、餘りぶしつけ故によしました。御勉強と御自愛有らん事を祈ます。是で筆を擱き、枕に就ます。定めし余は夜中に斯の如き家庭を造つた事を夢見ましよう。

寒き夜を琴にイむ垣根哉

正月七草の夜

名前を書ても御存無き者故書きません廣尾に住む男

何町何番地

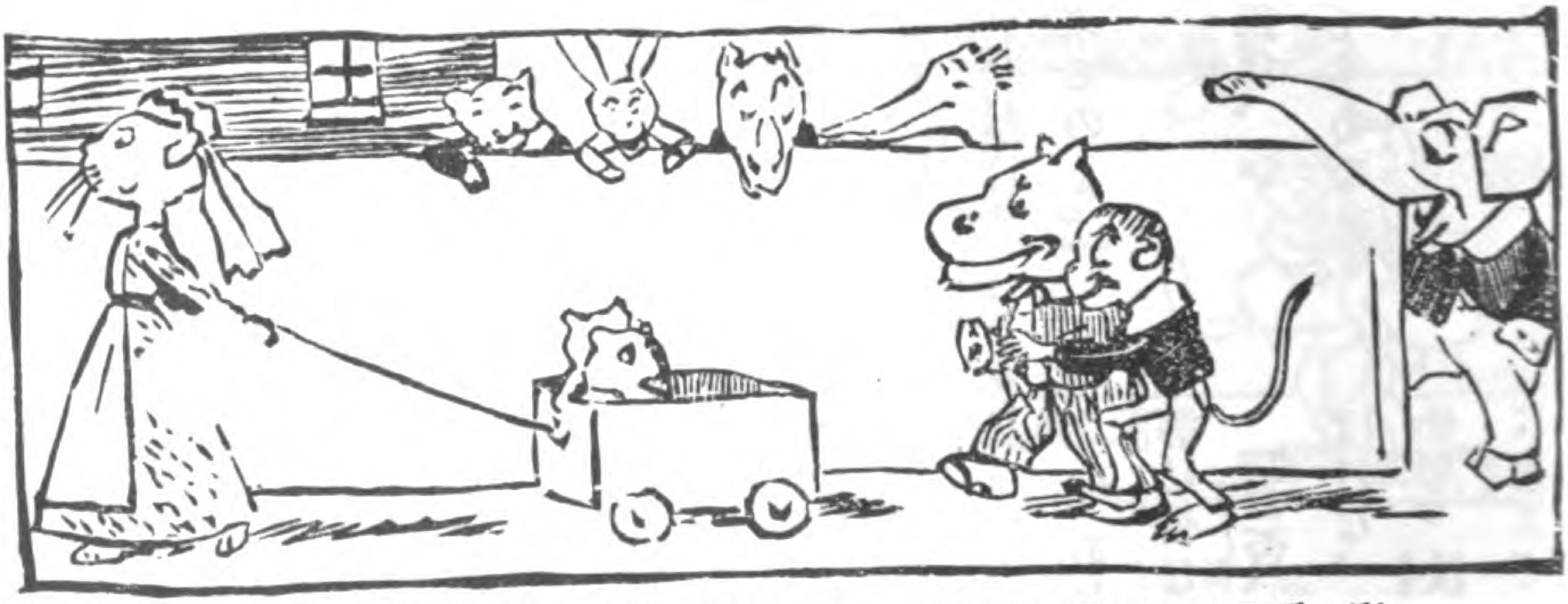
河野様

苺花子と日光郎

森の中のずうつと深く、濕氣ぽくて、青々とした叢に、何本ともしれぬ蕨に隱されて、日光も見ず、小さな白い苺花子が生植いて居た。

其葉は巾が廣く數も澤山あるので、花は益小さく、色褪めて見ゆる計。あたりに生育つ、脊高な、フォクスグラヴ(草名)や蕨等は、此青ざめた稚い者を氣にさへとめぬ位。彼等は『あんなちつぽけ花に、あんなに澤山葉を有つて、無益ぢやないかしら。』と、習慣の樣に云ふのである。

こんな御世話燒を聞く每に、小さな苺花子は、悲しくなつて、『私はまあ何の因果で生れたりしたのかしら。眞暗ではある、淋しくはある、思ふて呉れる人とてはなし。』と思續けた。



(1) 馬曰く「おい靜かにしろ。あの子猫の乳母を一ツ驚かしてやる。」

或日の事、一人の子供が來て、生々と綠色さした蕨を、一抱程も採つて行つた。それから、辛くも日光が、きら／＼さし込んで、白い、小さい／＼花の頭に照る樣は、露の玉かと見える計りに花の光澤を添へた。

『御身を愛するよ。よ、可憐い苺花子さん。私は汝がいとしいの。』と、日光は耳語いた。が、小さき花は、此迄久しく、數にも入れられないで暮して居たから、此をも眞とは思ひかねて云ふ樣、

『私ぢやなくツてよ。日光さん。迚も私でなんかなくツてよ。其らフォクスグラヴさんの事よ。此森の女王樣、眞紅の鈴形の花を持つてるあの、でなけりや、その側に攀ぢ纏つて居る、可憐い野薔薇子さんのとよ。』

『否苺花子さん、私の好いて居るの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、あなたですよ。貴孃は眞にやさしくて温柔しいから、尋るにえらい骨が折れました。だがね、此度からは、毎日何時間か貴孃と一所に暮しませうね。』他の草の奴輩、日光が苺花子と、話して居るのを見付けて、苺花子を嘲笑て居る。が、苺花子はうれしさの餘りに、其れには氣が付かなかつた。

斯ういふ譯で、日永な、暑い夏の日終日、日光は苺花子と暮して、さよなら、お休み、明日も復來るよと、約束して別れた。

其晩、一疋の螢が、通行掛りに、苺花子と話す氣で止つた。苺花子は、『おー螢さん、私はほんとに、嬉しくてよ。日光さんが來てね、私はこんなに小ぽけでも、私が好愛だつて。してね、あの人は明日復た來るのよ。』といふと世間通な螢、

『ふむう、左樣に宛に爲なさるな。日光郎は、いかい遠くから來る旅行客だよ。何を云つてもあてにはならないせ。』

『でもあの人はまた來るつて。善い人だもの、約束通來なさるわ。來なさるとも。』

『はあー、私は日光郎をよく知らないが、あの人の從弟になつて居る、月光郎の事はよく知つて居ます。私は只友達として一言注意迄に云ふがね。先づ寢て日光郎の事は忘れて仕舞ひなさい。さよなら、御眠み。』

然れば、小さき苺花子は、眠に就いて、華なうれしい夢を結びました。が、翌朝起きて見ると、此迄よりは曇つて、暗くつて、日光は居やしない。

雨は降る〳〵、大きな粒になつて、苺花子の傍の蕨の上を、はら〳〵と滴落ちる。苺花子は此迄、雨などを見も知らぬから、何事かといぶかつて、『信切なこと。蕨さん、あなた、私の爲めに泣いてゐるの。』といふと、蕨等は皆な大笑ひである。

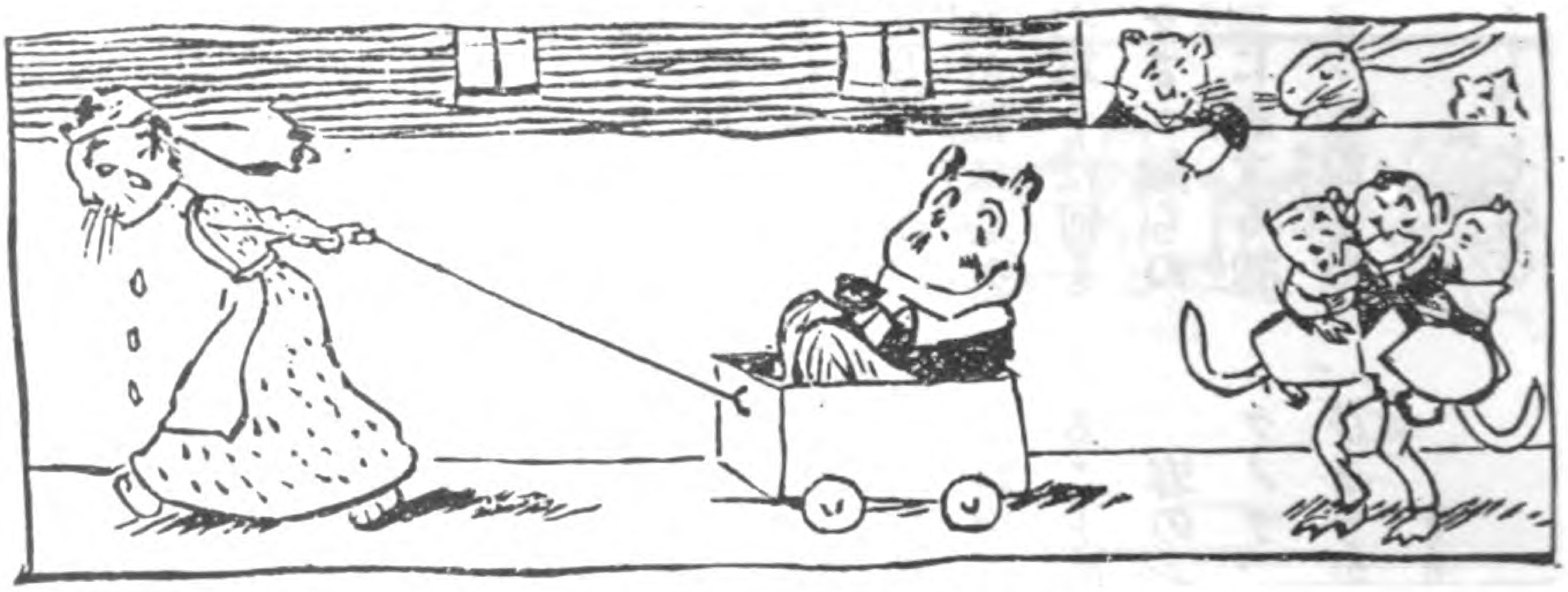
『否否、小さな苺花子さん。私等は、汝の樣な小ぽけな、意氣地なしに灑ぐ樣な無駄な涙はありません。汝は昨日來た艶郎が、また來ると、ほんとに思ふてるの？』

小さき莓花子は失望して、自分の緑の、葉より先方を見やる力なく、其頃には既に太陽は雲を破つて出そうにし居たのであるが、其れもしらなかつた。

遂に太陽はうららかに差昇り、森のかなたには、奇麗な虹が顯はれた。小さき莓花子は、此五色の虹をも、見ることが出來なかつたが、早くも日光郎が、雫の滴る蕨を過ぎて、差込むのを見た。

日光郎は『あー小さい人よ、汝は私が忘れて仕舞ふたと思ふたの？』と問へば、莓花子は、日光郎を疑ひし恥かしさに、頭垂れたので、尚語を繼ぎ、『貴孃はもつと、信ずる心がなければいけぬ。よ、莓花子さん、私は只時の來るのを、待つて居たのです。』

暑い夏の日の、幾日といふ間、撓み



(2) 馬曰く「まんまと首尾よくおーい樂だ！」乳母曰く「何だか急に重くなつたよ。どうしたのだらう。おゝ暑い！」

なく、日光郎は説かれました。莓花子は、溫さと愛とに圍繞まれて、追々生長し、最早靑白い、病氣持の樣な花ではなくて、深緑りした草葉の間に、紅玉の樣に耀いて、居る、美事な、莓花孃となりました。

あたりの蕨や、フォクスグラブ(草名)連すら、譽め稱へぬ譯にて行かぬ程になつたので、

『何したのだろう、あの小ぼけな莓花子さんは丸で變つたねえ！』

日光郎は、莓花子に耳語いた。

『貴孃の許に私に行けと命じたのは、誰であるか御話爲ませうか。其はあの太陽樣ですよ。太陽樣はね、此の世の中を、樂しい所にする爲めに、子供の私等を、差向けるのですよ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春の七草

＝七草の說明＝

＝家庭と自然界の智識＝家庭料理及理科の參考＝

＝なゝくさとつみくさ＝ワザト二月に說明す＝

久田二葉

聞くところによると、小杉博士が若菜と云ふ題で、

なゝくさのそのひと草をつみそめぬ
いまもさかりのむつの花ぞの

なる一首を送られた向島の百花園では、新たに春の七草植込の壇を設け盛んに培養するのみならず、別に提籠に七草を植へて客人等の土產物にして居るとか、なかなか雅びた而かもよいことである。吾が輩は是を聞いて同園の趣向を賞すると共に、春の七草とは何と何を云ふのか、又ゴギヤウは何であるかをさへ知らぬ今の家庭の爲めに、家庭理科乃至は自然物に對する智識の一頁として、これに關することをちよツと說明しやうと思ふ。

お正月の七草は何處でも七草正月と云ツて、七味のお粥をこしらへ、一年中の病を除く爲めとコジつけて祝ふが、地方によツては、芹を主として他は大豆か菜類の二三種で略して居る。これはヨホド古くから我が國に行はれることであるが、いつの時代から何と何とを何の爲めにやるのか確然分ツて居らぬ。亦た芹位は何時でもあるが他の植物は大抵枯れて居るか或は雪の下になツて居るので、お正月の七日に用ゐられそうにもない。ソコデ我が輩の思ふには、春の七草はお正月に祝ふのに用ゐるのみでなくて、家庭の坊ちやんやお孃ちやん達の摘草のよいよい材料にするべきものであると思ふ。そうして此の摘み草は何れも其の母なる人の料理によツて、一家團欒の夕には樂しく其味を賞することの出來るものである。

春の七草は一說によると、ゴギヤウ、ハコベ、ホトケノザ、スヾナ、スヾシロ、セリ、ナヅナであると云ひますが又こんな歌もあります。

せりなづなごぎやうはこべらみたなくさ
すゞなすゞしろこれや七草、

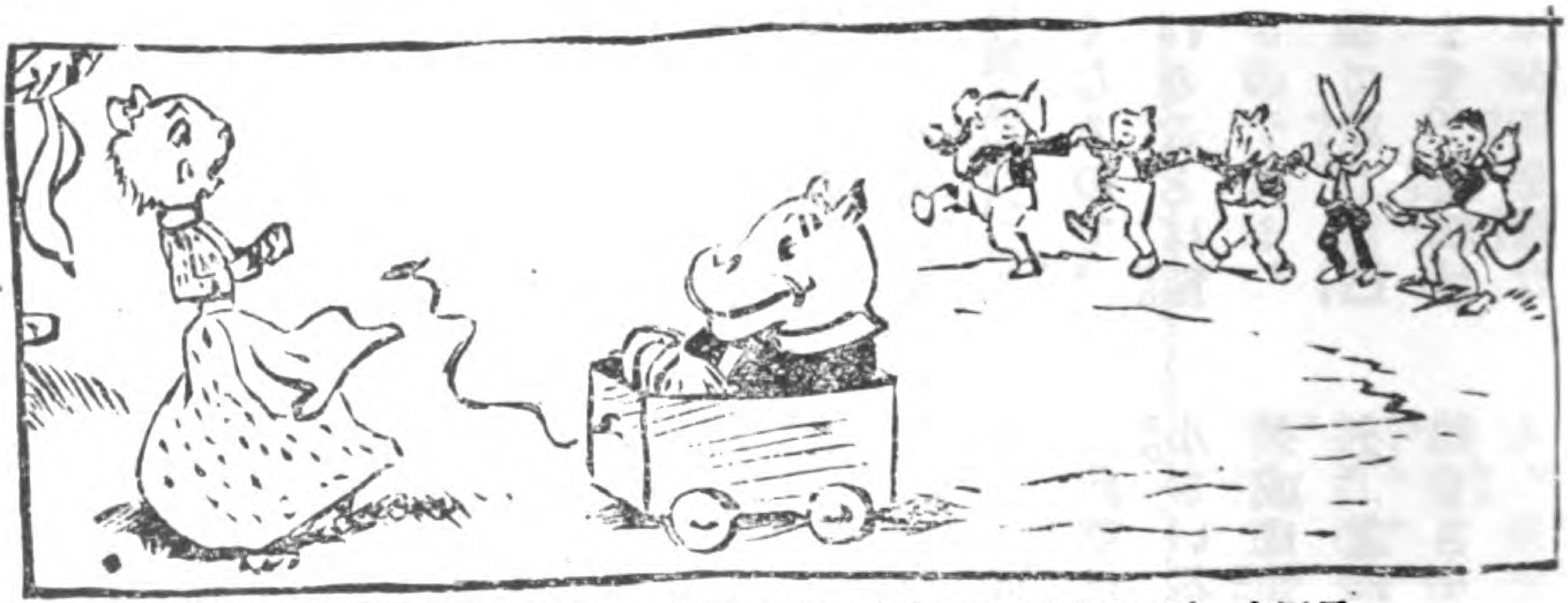
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今、一種々々の説明は前の説に從ひますが、一體此の七草の慣例は、日用の野菜以外の雜草にも食用にされ藥用にされる大切の植物なることを吾人の頭へ注ぎ込むによい媒となッて與れたのを、我々植物の友は謝するのである。

七草の濫觴

に就いて兼ね〴〵調べやうとして居るが、時と機を得ぬ爲め、調査の手が屆かぬのは殘念のことで、以後も調べることを續ける。これは某講談師が『伊達騷動』の中に云ッて居たのを面白かつたから借用仕ッたので。

『古、唐土の流砂川の河上に居りました鴆と申す毒鳥、先づ雀の形をして、鼠色の羽を生やして居るものだそうで。それが我が日本へ飛び來り次第々々と群ッて津輕の海上に、五萬も八萬



(3) 馬曰く。「どうも好い心持だつたよ有難う乳母さん！」乳母曰く。「あゝら何て云ふ惡戯坊主なんだらうね。人を馬鹿にしてゐるわ。」

も舞つて居りました、其の羽の間から白い粉がコボれて海へ入る、その海水を魚が呑んで死ぬ。のみならず其鳥が遂に陸の方へも舞つて來て田畑へ毒粉を落し其の毒塵のかゝつた菜や大根を食する人、少なからず毒に當つて斃れました。ソコで奏聞を遂げ天文博士陰陽の頭が占ひたる所、鴆と云ふ毒鳥なることが分かッた。依ッてそれを退治する爲め、其の毒鳥の嫌ひまする七味の草、即ちスヾナ、スヾシロ、ゴギヤウ、ホトケノザ、セリ、ナヅナ、タビラコ。この七草を叩き鉦太鼓で其鳥を遂ひましたのが鳥追ひの初めである。そうして柳の板の上で、玉作の技を以て叩き、其の稱へ方が、七草叩き、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先きに……ストトン、ストトントン。

而して其の七草の中のセリを茶碗に入れ水に浸し、其の水をつけて爪を除るのは毒を受けない爲めである。これが即ち七草の濫觴でございます。

初めに云ッた通り左に七草として說明する草は、大抵お正月に摘めぬものばかりだから、ワザと正月の逝ッたこの月に於て說明し、摘草の栞にするのである。讀者諸君には諒せられよ。

一　ゴギヤウ（御形）

これは皆さん御存じのヨモギのことで、日當りのよい田畑の畔や野原に自生する二尺內外の草であります。私は先年、越中と飛彈との境の深山で七八尺のを見ました。菊科に屬する草で、その嫩葉は摘み採つて、餅や團子に交せて搗くと、香氣も味も佳くなるので、モチグサと云つて日本の家庭に珍重せられることは豫て御存じであらう。

また此の草は、成長つた時の葉を採集して乾し、臼に入れて搗き滓を除いてモグサに製造します。艾絨は印肉の材料にしたり座布團の中へ入れたりお灸を饐たりするのに使ふ大切のものであります。山中の農家は此のヨモギの若葉を揉み出して得たる苦汁を呑むと、お腹の痛むのが治ると云ひます。

二　ハコベ（繁縷）

ハコベラとも云まして、石竹科の植物。オホヤマハコベ、ツルハコベ、シヤマハコベ、ウシハコベなどのお兄弟をもつて居ります。生草を小鳥の一種カナリヤなどの飼ひ料にし、嫩葉をひたし物にして食します。それから此の草で、ハコベ鹽と云つて一種の齒磨粉をこしらへることが出來る。其の法鐵製の一種の器械へ入れて炒り、水分が無くなれば鹽を加へ、交せては炒ること再三にして粉にし用ゐるのである。

此草は一株から莖が幾本も出て地上を橫臥し、白い小さい花を夏中咲きます。山間の農家などはアサシラゲ或は骨接草と云ひまして、牛馬や人の怪我した局部を、之れが莖葉共煎じ出した汁で洗ひます、なか〳〵効くさうです。

三　ホトケノザ（佛座）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちよつと詩的な名ですなー、これは紫草科の植物でタビラコ（鷄腸草）一名カワラケ（土器菜）を、春の七草にする時に呼ぶ名であつて、唇形科に屬して紅紫色の花を咲くホトケノザと云ふ草は別にあるのである。皆さん之を間違へてはなりません。

此の草に、果實が蕚より短くなるのと長くなるのとあつて、始めの者をミヅタビラコ、後のものをタビラコと云ふて居る。何れも嫩葉を食用にされます。書物によつては田平子と書きます。

四　スヾナ（菘）

これは唐菜のことであつて、唐菜は蕪菁の一種で、雲苔に似寄つた主に漬て喰ふ菜でありますが、今では甘味い奇麗な蕪菁があるので、あまり喰はぬやうになつたから、いつそのこと蕪菁のこと丶思つてよいと思ふ。蕪菁は一名かぶらと云つて十字科の植物。皆さんが昔しから御存じの蔬菜である。長蕪菁、天王寺蕪菁近江蕪菁は美味なるもので、緋蕪菁、黄金蕪菁、斑蕪菁は珍らしいもの、夏蕪菁、時無蕪菁は何ん時でも播いて食膳に供へられる重寶なものですが、此の他にもタントの種類があります。

これは日本でも有名な蔬菜だから大によい種類はあるが、それでも種子を採る時に注意せぬと、直ぐ種子が變つて、長蕪菁だと思ふても、其の種子から出來たものは短蕪菁になることがあります。此のことは面白く別に語る機會もありましやう。

五　スヾシロ（清白）

これは萊服を春の七草に用ふる時の名である。萊服は十字科植物で、我が邦菜食の第一等とさへ云はれる

THE TRUE BEAUTY.

He that loves a rosy check
Or a coral lip admires,
Or from star-like eyes doth seek
Fuel to maintain his fires;
As old time makes these decay,
So his flames must waste away.

But a smooth and steadfast mind,
Gentle thought, and calm desires,
Heart with equal love combined,
Kindle never-dying fires:—
Where these are not, I despise
lovely cheeks or lips or eyes.

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大切の植物であることは御存じの通りである。四季共に食膳に供へられるので、漬物用、煮食用、辛料用、貯藏用、春季用、夏季用、秋、冬用、干用等の各方面へ向つて、改良に改良を加へられ、今ではキヅミダイコン、辛味萊菔、守口大根(一名細根萊菔)、宮重大根、方領萊菔、櫻島大根、廿日大根、時無萊菔、夏萊菔、練馬大根などの各特徴ある良種類はタントあるやうになりました。

六　セリ（芹）

これは小さな葉と獨特の香氣と味とを持つて居るので食用に珍重される繖形科植物であります。二種ありまして、一は田水斬又は葉水斬とも云つて、莖は赤色を帶びて晩春にあるものであります。他の一は畑水斬或はオカゼリ、シコゼリなど云ひまして、冬から八百屋へ出て居ます。どれも人の好むものですが、地方に依つて食ひ方が違ふ、一例を擧げると關東では主に葉莖のみを食し、關西では根莖葉共に食ひ、奥羽地方では主に根莖を喰ふさうである。だから培養法も所に依つて少しづゝ異ふやうである。

七　ナヅナ（薺）

これはペンペングサ又はサミセングサと云つて、萊菔と同じ十字科植物であります。其の白い花を開いて三角形の軍扇形の果實を結ぶ可愛らしきは非常なものです。葉はやはり食用にされます。

*　*　*　*　*

これで七草の説明は濟みましたが、皆なさんは之れと來月説く『自然が與ふる春の摘草』とをみて、家庭擧つて摘み草をやり、自然の懐に抱かれて、宇宙の妙音を聞き活畫を見、清潔な空氣を吸はれて、自然が與ふる春を迎へられんことを望みます。(完)

=次號には『自然が與ふる春の摘草』を語る=

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

酒と人体

＝アルコールの恐る可き十二の理由＝

ドクトル 有田九皐

第一――西洋にも東洋にも「人を知るには其親友を見よ。」と云ふ諺があるが、夫は又丁度アルコール其物にも適用する事が出來る。即ちアルコールは惡友を有するのである。ナフタ一名メチリックアルコールは其一ツ。之は木を蒸溜して製したもので、常に揮發性を有する、ヒユーゼルヲイル一名アミリックアルコールも亦其一つである。米國下等勞働者や亞弗利加土人や印度人やが屢々種々なる罪惡を犯し易いのは、彼等が常に飲用する粗製ホイスケーの内に、所謂此ヒユーゼルヲイルを含有するからであると云ふ事である。

第二――アルコールは植物を毒する。植物の生命を傷害するものは、恐らく人類に對しても亦有益なるものではあるまいと思ふ。僅少のアルコールを含有する水を或植物に灌注せば、其綠葉は直に萎縮を始め、色は黄に變化して、遂に死滅するに至る。水の千分中、僅に一分のアルコールを含有するものにても、上に述べたやうな結果を生ずるのである。

第三――アルコールは動物を害する。アルコールを含有する水中に科斗を投入せば、一分時間にして死するのであるが、水蛭及び其他の小動物にも亦同樣の結果を來すのである。佛蘭斯の或るドクトルは、ブランデー、アブシンシー、葡萄酒等を以て、家禽を色々に試驗して見たが其結果は、家禽も矢張人類の如く、下戸より段々と上戸に進む傾向があつたと云ふ。又アブシンシーを飲用せしために壯健なる雄鷄は二タ月、ブランデーにて試みられたものは四ケ月半、葡萄酒を飲用せしめた家禽は三ケ月餘にして、何れも皆なアルコール中毒を發して死亡したのである。

第四――アルコールは麻醉劑である。アルコール飲用の結果、異る二期の症狀が出現する。即ち其第一期は刺戟期であつて、麻醉は其第二期である、第二期によれば知覺も感念も大に痴鈍となるのである。人類が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

疲勞せし場合に酒類を飲用せば、其疲勞の感覺が大に減少するのである。夫は勞働(精神的或は肉體的)の爲に減損せられた活力が快復されたのではなくて、全く知覺神經麻痺の結果である。アルコール中毒症に罹つて死亡せし人には、必ずアルコールの害毒が麻醉性なる事を證明して居るのである。小量のアルコールを二三分間口中にくゝみ居れば、甘味も、酸味も、鹽味も、苦味も、味ひ知る事が出來なくなる。又或分量を飲用せば、外科的の治療をも、極めて僅かの疼痛にて、或は全く無痛に治療を成就する事が出來る。丁度エーテルやクロールホルム(共に麻醉藥)の作用も同じいのである。

第五――アルコールより來る人體の衰頽。アルコールは夫を常に飲用せる者の筋肉、心臟、腦髓、神經、肝臟、腎臟などの追々衰頽するのみならず、總ての身體機關を衰弱せしむるのである。

有名なる英國のドクトル、カーペンター氏は、血液五百分中にアルコール一分を加ふれば、已に血液中の血球及び纖維素に病的變化の生ずる事を證明した人である。是に由て見れば、其飲料の百分中、三分或は五分の少量のアルコールを含有せるものと雖ども、甚だ危險なりと云ふ可きである。

第六――酒客と腦髓。健全なる腦髓は、頭蓋骨の保護無くては其形態を保存し難いほど柔軟なるものである。故に極めて鋭利なる刀物にあらざれば到底其構造を亂さずに切開する事は出來ない。で或腦髓に就て委く調査するの必用ある場合に於ては、夫を鞏固にする爲め、數週間或は數月間アルコール中に浸漬して置く筈だが、酒客の腦髓は初めより固く、殆んどアルコール漬の狀態であるから、解剖學者は只其指頭の知覺斗りで、暗室中に酒客の腦髓を鑑定する事がある。――精巧なる器械の作用に依て、人の感覺、思考、視覺、聽覺、働作等が、或刺戟に因て起る正格なる時間の長さを計算する事が出來る。が、ホイスケー貳ヲンスを飲用した結果は、丁度其時間の長さが貳倍に增加するのである。此試驗は明 にアルコールが腦髓に麻痺的

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

感化を附與する例證であらう。

第七――アルコールは動物溫を減少する。一杯の葡萄酒或はホイスケーの爲に溫暖なる感覺が起るのは、夫は一種の誘惑である。飲酒の爲に血液巡循の平均が亂れて、只一時的に或部分の熱度を增すのであるが、檢溫器は却て飲酒の爲に體溫の減少を證するのである。英國の有名なる衞生學者ドクトル、ハーケス氏も、寒氣を防禦する爲にビール或は葡萄酒を飲用する者を非難した。プロフエッサー、ミルラー氏は、露國の軍隊長官に上告して曰く、『寒中の行軍には、絕對的に兵士の飲酒を禁ずべし。何となれば、凍創及び他の寒氣の爲に起る障害が、殊更飲酒家に發生する事を認識すればなり。』と。

第八――アルコールは興奮劑にあらず。醫療上に酒類を應用するは、主としてアルコールが興奮劑であると云ふ一種の理屈に依るのである。併し、最近の研究に因て、夫は興奮劑と云ふ可き道理の無い事が明了になつた。實に疲勞せる人や、衰弱せる病者やにアルコールを飲用せしむる事は、最も無益有害の處置であるのみならず、却て其生活力を壓迫し、或は疲勞せしむるのである。飲酒の爲に勢力の增加したかの如くに感ずるのは、只々一種の欺僞に外ならない。

第九――酒客の胃弱。酒客は必ず早晚胃弱症に罹るものである。夫はアルコールが胃腑を衰弱せしめ、怠慢ならしめ、遂に胃の消化液を製造すべき作用をも衰弱せしむるからで。加之アルコールは胃液中のペプシンを沈澱させ、且又アルコールが胃中に存在する時間は食物の消化作用が進行しないのである。

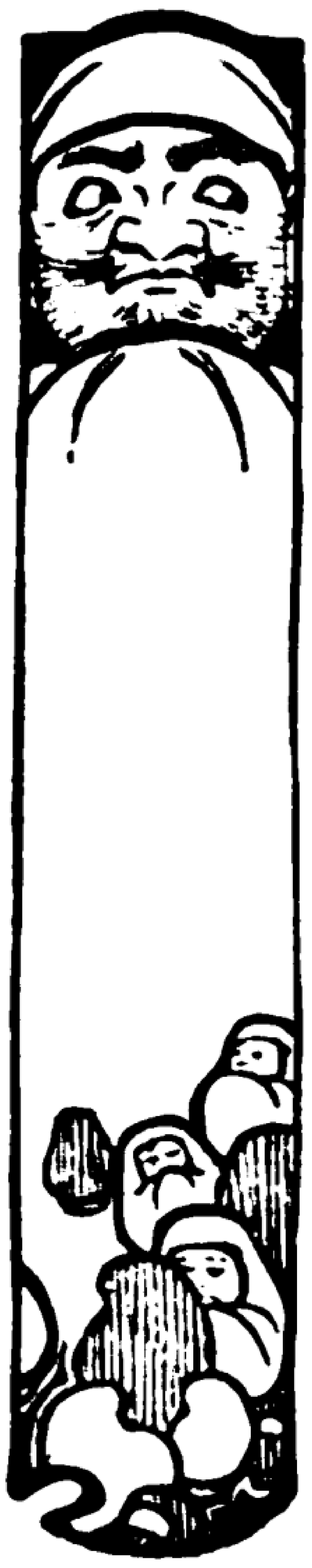
第十――酒客と肺結核。ピ、ダブリユー、リチャルドソン氏の調査に據れば、アルコールは肺結核の豫防薬でない斗りでなく、却て直接に最も不良なる肺結核を誘起せしむるのである。而して酒客の肺結核は如何なる治療法の下にも良成績を見ない而已ならず、其死に至るの經過が甚だ速かなるものである。

第十一――酒と精神病。酒類の感化を受けた人々の狀態は、既に夫の精神病患者と大異が無いのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

酒は或他の物よりもより多く精神病の原因と成易い。佛蘭西の統計に依れば、男子の精神病患者の三十四プロセントは飲酒が其原因をなして居る。英國の或瘋狂院の統計に因ると總體の六十プロセントは矢張酒類が其原因である。

第十二――アルコールと子孫の關係。ドクトル、ホウエー氏の調査に曰く、マサチユーセット洲に於ける先天性白痴の半數は、酒客の子女である。又或兩親の飲酒家である一軒の家に居る七人の小兒、それが何れも皆先天性白痴であつた事を報告して居るのである。英國に於ても瑞典に於ても、白痴の半數は酒客の子女である事が示され、聖彼得斯堡に於ける白痴の過半數も矢張亦酒客の子女である事が實驗された。恐らく歐洲諸國で同樣の結果を見ない國はないのであらう。



英蘭銀行の珍品

日本で日本銀行は日本一の銀行だが、英國の英蘭銀行は世界一の銀行で、其蓄積せる山の如き金貨金塊、世界各地から幾十億萬圓の取引、其一筆一筆は世界の金融に大影響を及ぼすのである、併し此樣な話は幾多の書籍にも出て居ると思ふから、こゝにはあまり人の知つて居ない、英蘭銀行所藏の骨董品の事を話そう。

英蘭銀行が始めて千六百九十四年、即今より二百九年前業務を始めた節は、僅か四十四名の行員で重役も何も皆唯一室にかたまつて仕事をして居た。

なにしろ、此銀行の歷史は二百年を越へて居るから其間に隨分小說的の事もあり、古物として面白いものが銀行の一局即銀行の博物館に保存してある。其保存品の中に一錢紙幣（ペニー）が一枚ある。之は嘗て銀行が間違へて發行したものだが、一時は他の兌換券と同樣世間に流通して居つたので、銀行は五磅（五十圓）の懸賞でやつと回收する事が出來、古物蒐集家の手に渡らないですんだそうだ。又かの千七百四十五年銀行の大厄の節、銀行を救ふた面白い兌換券も保存されてある其來歷は左の通りだ。

其年銀行は大變な取つけに出遇ふて、到底仕拂停止より外に策なしと思はれた。其時重役は時分を見計らひ、數多の行員に策をさづけた。行員は客にばけ一群衆中にまじり、他人と同樣兌換券を差出して引換を請求した。其引換は六錢銀貨（六ペンス）で願いたいと出たので、此小銀貨を勘定するに中々手間がかゝる。之れで銀行はすつかり現金を用意する時間を得て首尾能く其厄をのがれたのだ。

又百萬磅（一千萬圓）の紙幣もある。之は銀行創立以來唯一度一枚印刷されたもの。尙其他發行してから銀行に歸つてくる迄、殆んど百五十年間かゝり、其間世間に流通して居た兌換券もあると云ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新婚の姪に與ふる書

枯川

（其二）

卿の此度の結婚は予に取つて先づ意外の事であつた。何となれば、卿はまだ僅かに十七歳にして、予の眼中には一人前の婦人として映つて居なかつたからである。

予が是れまで卿に送つた手紙は、悉く子供扱ひの文言であつた。卿の手紙も亦實に無邪氣なる子供の言葉であつた。然るに、今や卿は既に人の妻である。

予は最早卿に對して子供扱ひの手紙を送つてはならぬ、予は今後何につけても確かに一人前の婦人として卿を見る積りである。卿も亦必ず子供として予に對してはならぬ。卿は今後何處までも確かに一人前の婦人として其責に任せねばならぬ。

斯く云はゞ、卿或は其荷の重きに驚くであらう。若し驚く事ありとせば、予は深く卿を憐む。さりながら、如何に深く卿を憐むとも、予は其荷を輕くするの力を持たぬ。卿は既に自から重荷を負うたのである。而して其重荷は何人も代つて之を負ふ事の出來ぬ者である。

元來予は餘りの早婚に反對する者である。精神及び身體の發育の上から見て、婦人は廿歳位より以後に於て結婚するが適當では無いかと思ふ。廿歳以前に於ては、まだドーしても一人前の婦人にならず、從つて人の妻たるの資格を具備せぬと思ふ。然し、實際に於ては、殊に多く田舍に於ては、甚だ若き花嫁が何の差支もなく其地位に据つて居る。予の見る所に依れば、それは眞に人の妻たるの職分を盡さぬからである。只男子の玩弄物とせらるゝ場合、只其一家の人々に雛人形の如く扱はるゝ場合、或は單に下婢の如く遇せらるゝ場合には、其身體さへ相應に發育して居れば、精神の發育は足らずとも年齡は如何に若くとも何の差支なく花嫁の役が務まるのである。然しながら、眞に人の妻たるの職分を盡し、夫に對し、家族に對し、隣人に對

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、親戚朋友に對し、一々其責を全くするには、餘りに若き花嫁は到底其任に堪へる者では無い。其任に堪へぬ者が其地位に据る時は、必ず輕蔑を招き侮辱を受ける事になる。夫に對する妻の地位の高まらぬのは、畢竟妻たる者にそれだけの實力が無いからである。實力が無いから輕蔑を招き侮辱を受けるのである。されば廿世紀の新社會に於て、女子の地位を高めんとするには、是非とも早婚に反對せねばならぬ。

予は斯くの如く早婚に反對するが故に、卿の此度の結婚にも餘り贊成せぬ者である。然しながら、贊成と反對とは結婚以前の事で、今となつては只前後の策を講ずるより外は無い。そこで予はモウ卿の早婚を責める事は止めて、寧ろ卿が早く自から進んで此重荷を負うた勇氣を賞めて、而して更に其勇氣を鼓ひ起して何處までも其重荷に堪へんことを希望するのである。

是れより以下に於て、予は種々なる方面に於ける卿の心得を說いて見たいと思ふ。繰返して云ふが、予は何につけても確かに一人前の婦人として卿を見る。既

に人の妻として其地位に在るからは、年の若き故を以て用捨はせぬ積りである。

理想の生活

瑞西と以太利の國境ひに小さな村がある。こゝに近頃好な理想生活の組合が出來た。或以太利記者の言に由れば、此組合は三十八人の會員で、人生の幸福と云ふ問題を解決するのが目的で、會員は肉食せず、衣服も極めて質素で、帽子をかぶらず、食物は唯菓物と野菜だと。會員の中十六人は女でやはり男子と同樣其組合の規則を守つて居る。

動物の游泳

大概の動物は學ばずして游泳法を知つて居る。過つて水に落ちるか、又は水中に追ひ込まれた時には、知らずしらず水上に浮び樂に游泳する。尤も猿、駱駝、麒麟抔は例外で、他の助けがなければ泳ぐ事が出來ない。兎は上手に泳ぐ、陸上動物の中では唯栗鼠にまける丈だ。栗鼠は其重い尾を水中に沈め、頭を高く上げて波に和する水鳥の如しと云ふ有樣である。人間は早い小舟に乘つて漕いだら競爭が出來るだろう。

家庭記者に訴ふ

藤浪女

家庭記者閣下——妾は新年初刊に於ける夕の家庭に輝ける妻の笑顔てふ奥床しき一文を誦讀し、女の身の如何に幸福に榮光あるかを感謝す。そは妻女が夫に對する一片の同情は、能く疲れたる良人を慰め、一滴の紅涙は能く夫の心を和ぐるに足ると知りたればなり。

然れども翻て我日本に於ける、夫の位置、妻の境遇を熟視すれば、唯失望落膽の外なし。見よ幾多の氣節ある婦女は、無節操なる夫の爲めに精神上無殘なる殺戮を受け、故なくして破鏡の悲に遇ひ、涙の内に一生を畢はるに至る。多くの男子の語る所を聞けば、女の學問は目の上の瘤、女怜悧して牛賣り損ふと。彼等の理想の妻は無學無能唯良人に盲從する者か。

世に我國の男子程高慢不遜、不節操なるは少からん。(家庭記者閣下の如きは然らざれど) 口に立憲政體四民同權など立派なる事を稱ふれど、自治の實の擧からざる如く、各自は專政の君主を氣取りて、婦女を見る事奴隷の如く、上大勲位侯爵より下裏店の宿六まで婦女を以て男子を慰むる玩具の如く思ひ、疊と女房を同一視して屡々之を新にするを心よしとす。嗚呼彼等に一片の誠意あるや、古より女は己を愛する者の爲めに粧ふ。若し夫にして妻を信愛せば、誰か彼の爲めに生命を惜まざらん。唯に夕に於て彼女の顔の輝くのみならんや。然れども悲いかな、今の婦女は彼女の愛を捧ぐるによしなし。當世紳士と稱らるゝ人士すら、藝妓を弄び、賤婦に戯れ、甚數は内妾を蓄へて恥ぢず。夫たるの義務を全せずして、徒に妻を責て云ふ、家庭の不快は妻にありと。斯くても妻は平然として微笑し得べきか。彼女が夫を思ひ子女を顧み——否正義を思ふ時彼女は輝かんとして輝き得ざるなり。

妻の笑顔を望み給ふ家庭記者閣下。世に樂しきホームを望み給はゞ、先づ男子の不徳を責め、婦女を信愛する事を教へ給へ。然る時に、妻は喜びて彼に心服し、常に彼女の笑顔は彼の前に火よりも美しく輝かん。女は皆輝かん事を冀望するなり。

藤浪女と名乘らるゝ君へ

熱烈の文字、句々皆な血と涙とも申すべきか。固より貴意の如く、我國舊來の男尊女卑の陋習は、施て今日の暴狀を呈した事とて、この惡空氣を一掃するには、甚だ困難な次第であります。併し乍ら我家庭雜誌は幾多在來の習癖を破り、新代的家庭を樹立することを本願として產れたのであるから、これ迄の習癖や思想に毫も與すべき理由を見ぬのは勿論の事、此甚だ困難なる事業に對し、全力身全力を竭して改善を望むべきは、記者が常に最も光榮ある天職と心得て居る。幸にして新代の空氣我邦の地上にも漸く其區域を廣め來り、君の如き氣丈なる女性を見るに至つたのは、偏に世の具眼者と共に祝賀すべき所、小生は君の如き婦女子諸君が一人でも餘計に顯はれて、道理に於て首肯し乍ら事實に於て男尊女卑の殘壘を保てる今日の社會に對し、大なる輿論の中堅となり、一擧して年來の理想境を發展されん事を祈るものであります。わが「家庭雜誌」微力ではあれど、陰に陽に細きペンを振つて、醜惡分子の大掃除人たるに吝ならざらむ。

新年號に於ける一文は、無論多くの場合に於て實際に違かつた。併し、筆者に深い意あつての事ではありません。隨分長い間、男子におさへ付けられ、いぢめ廻はされて來た女子に向ひ、厭が上にも又強制的の注文をしたとばかり見られては、筆者は甚だ遺憾に存ずる。云はゞあれは新代の家庭に於ける細君への希望であつた。少なくとも我家庭雜誌の愛讀者に依て築かれつゝある家庭では、さる忌ましき舊時代の惡風が殘つて居やうとは思はなかつた。筆者があの文を草しやうとした理由は即ちこゝらが動機であつたので。

(浩山生)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯机上より

本號の內容 前號の本誌は新年の事でもありまして、可成屑の張らぬ讀物のみ集めて、諸君に供給を致した。就ては其必然の結果として、本號には七分通り迄固い文字を以て滿たしてあります。

社會主義婦人講演會 極めて遽かに企てられて、又極めて遽かなる實行を見たのは此會でありませう。發起者は堺氏を始め四五の人々、即ち其第一回が去月二十三日の午後、美土代町の神田敎會に於て開催されました。聽講者は婦人に限るとの條件で同日は天氣は好かつたが、東京名物の風の強い日で、入口の机に聽講者を迎へて居た人などは、氣の毒な程其風に曝らされて居られたやうでした。開會になつたのは二時前だつたが、後れ馳せに來た人と合して、集つた人は二十人足らずでありましたらう。誰であつたか、今日は風が吹くから來ないのだらうと云ふ鑑定を下した人がありましたツけが、成程今日の日本婦人は、風を犯し雨を突いてまで社會主義者の婦人講演を聞きに來る勇氣がない譯だと、私は傍に居て窃にかう嘆じて居たのでした。かくの如く當日の會は誠に淋しく、これが東京の中央で開かれた會合とは、誰も思はれぬ程の不景色であつた。けれども當日來合せた若干の聽講者は眞に幸福で、恐らく寒さを堪えて行つた丈の甲斐があつたと思つて居るでせう。講演者は木下、堺、西川の三氏で其要旨は本誌卷頭以下に掲げてある通り。尤もこれは席末での覺束ない聞き書であるから、いろ〳〵不備の點も免かれません。（これは講演者並びに讀者諸君に豫め謝して置く）併し大體の點では誤らない積りである故、どうか當日の席上に列つて居る心持で熟讀して戴きたい。そうして、時代の思潮に一歩を拔いた新光明に觸接して欲しい。尙ほ此會は每月一回宛開かれる筈で開會はたしか月の第二土曜日と定つた樣子です。

寄贈の新刊物二種 一は宮川佳經氏著「活基督」で、綱目を十章に分ち、至極平明に基督の人格並びに精神を說いてある。他の新刊は「家庭敎育と題して、米國のスミス夫人著、チヤイルド、カルチユアーなれば、菅沼元之助と云ふ人が譯した物。開卷第一章の首に曰く。「人の母であるといふことは、世の中の最も面白ある職務でありまして、世に母ほど權威あり、感化力ある結構な地位をもつものは一人もありません。」――すべてかう云ふ調子で、家庭敎育に關する事柄を、丁寧親切に述べてあります。右は孰れも警醒社からの出版です。

「花を愛する人」「花を作りたい人へ」とて、久田氏が曾て本誌の讀者へ種子の配分を申出された處、忽ちわれもく〳〵と云ふ勢で、數日ならぬに五十三名の申込者があつたさうです。陽春四月の頃ともなれば、それ等の人々の淸い家庭と、それから其花の色香とが相映じて、定めし美しい事でありませう。

寄贈の雜誌新聞 餘白なき爲、評判の出來ぬを殘念になす

△帝國文學――十卷ノ一	京橋銀座	大日本圖書株式會社
△獨立評論――二卷ノ一	日本橋小舟町	獨立評論社
△社會主義――八年ノ一	神田三崎町	社會主義社
△あろは――一	布哇ホノルヽ	あろは社
△成功――三卷ノ三	本郷弓町	成功雜誌社
△新人――五卷ノ一	府下巢鴨	新人社
△政敎時報――百〇七	本郷森川町	佛敎徒同盟會
△通俗宗敎談――八	京橋築地	通俗宗敎談發行所
△常盤――七卷ノ一	横濱山手	常盤社
△直言――一	芝明舟町	直行社
△中央農事報――四六	芝公園十號	全國農事會
△文庫――二十四卷ノ六	神田南甲賀町	內外出版協會
△家庭之友――一ノ十	同	同上
△佛敎婦人――四卷ノ一	府下巢鴨	家庭發行所
△をんな――四卷ノ一	麹町下二番町	大日本女學社
△平民新聞――每號	麹町有樂町	平民新聞社
△婦女新聞――每號	牛込東五軒町	婦女新聞社
△へ庭新聞――每號	熊本	家庭新聞社
△佐賀家庭新聞――每號	佐賀	佐賀家庭新聞社
△評論之評論――六八	大阪	評論之評論社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毎月一回

直言

五日發行

一部金五錢　六部三十錢　申込總前金

△本誌は闇黒社會の燈明臺!!!

◎非なる儀式を排す　加藤時次郎

◎紳士病の原因……村松樂水

◎彈丸摘出事件を論ず　加藤時次郎　磯部檢三

◎尾崎行雄論……磯部孔夏

◎觀獄記……原霞外

◎藝妓論……白柳秀湖

◎新舊思想の衝突　村山漂浪

◎余が直言の方針……磯邊孔夏

◎時事直言……記者

◎社會百方面……秀湖

△本誌は家庭改良の羅針盤!!!

東京市芝區明舟町十九

直行社

堺枯川著　全

家庭の新風味

赤表紙合本一冊

割引價八十錢
郵税八錢

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。

著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんことを望む。

著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんことを望む。

要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんことを望む。

取次所　東京市京橋區新港町　由分社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

米國エドワード、ベラミー原著　平井廣五郎譯述

社會
小說

百年後之社會

定價金六十錢　郵便稅金八錢

ベラミー氏のルッキング、バックワードは**空前絶後之大著作驚天動地の大奇書**なり突過去幾多の**社會主義論者**が焦慮研讃したる大難問は巨眼鏡の如く英才天を凌くベラミー氏が小說に托して玲瓏卓拔なる論法を巧妙適勁なる文辭に孕ますや宿昔の疑團立ろに氷解し完全無缺なる理想社會の組織は輕々易々描出せられたり宜なり原著の世に出るや忽ち**五百**版を重ねて北米大陸を走り更に太平洋を超へて滔々歐洲各國に蔓り今や一千版の上に出で、尚且底止せざらんとす是れ其著**非凡の妙處**あるが爲ならずや其論法や其組織や其文章や一として作に奇を極めざるなく一たび之を讀む者**血沸**き**肉躍**り**案**を**打**て**絶叫**せん

發兌元　東京市京橋區尾張町二丁目　**警醒社書店**

婦女新聞社編輯局編

婦女叢書
第一編

天眞爛漫

▲定價拾參錢郵稅二錢▲郵券代用一割增▲
新聞代にて差引く事は謝絶

右は婦女新聞初號より第百號までの子供欄に掲載したるもの、內特に面白きもの、みを集めたるものなれば無邪氣なる家庭の讀物としては極めて適當なり怒れる人も悲しめる人も病める人も英雄も豪傑も之をよまば破顏一笑を禁ずる能はざるべし又家庭教育兒童研究には好參考良材料たらん

發行所　東京牛込東五軒町　**婦女新聞社**

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

堺枯川、幸徳秋水編輯

平民新聞

社會主義の思潮に接し**平民主義**の氣焔を見んと欲する者は本紙に來れ號を重ぬるに從つて**筆益健**也

▲定價二十部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢、總べて郵稅を要せず

▲**見本**●●●●●●●●●●に限り郵券三錢にて送る

▲**毎日曜發行**

發行所 東京麹町區有樂町三丁目一番地 **平民社**
電話本局三二六二

飯倉四ッ辻	飯倉支店	電話新橋一五七四番
赤坂表一丁目	赤坂支店	電話新橋二〇六八番
四谷大通り	四谷支店	電話番町五一〇番
牛込神樂坂	神樂坂支店	電話番町六三〇番
本郷一丁目角	本郷支店	電話下谷七二番
神田須田町	須田町支店	電話本局二〇七三番
銀座一丁目河岸通り	**帝國貯蓄銀行**	(電話新橋) 八一六番 二八〇八番
兩國米澤町	米澤町支店	電話浪花二五九〇番
淺草吾妻橋通	吾妻橋支店	電話下谷七三番
南品川一丁目	品川支店	電話新橋一一三九番
橫濱吉田町	橫濱支店	電話橫濱一三〇四番
日本橋坂本町	代理店 田中銀行	電話浪花二四〇番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

開業廣告

生儀多年濱田博士の助手となり東京産科婦人科病院に奉職中の處昨年九月同院を辭し左記の處に於て開業致し候間此段謹告す

▲毎日曜日には濱田病院副院長醫學士辻高俊氏來濱助診せらる

▲入院患者の爲めに病室の設あり

横濱市眞砂町二丁目二十六番地

朝長鷹次郎

東京神田區駿河臺鈴木町二番地（御茶水橋畔）

電話本局八八八番 一三八五番

東洋内科醫院

院長 醫學士 高田畊安

診察 毎日午前但日曜日及大祭日休業、入院診斷後臨時應需、火水土曜、窮者施診○病室増設落成

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱（停車場所在）

南湖院

副院長 醫學得業士 林止

診察 院長出診土曜日午後、副院長診察毎日午前、但日曜日大祭日休業、入院診斷後臨時應需、土曜日午後施診

東京麹町區三番町三十番地（市ヶ谷停車場附近）

高田病院施診所

主任 醫學士 松田三彌

診察 毎日午前、但日曜大祭日休業、窮者ニ施診ノ上其病名及養生法ヲ示シ處方箋ヲ與フ○往診應需

外科皮膚病 梅毒 痔瘻 **外**科的婦人科并道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際 出雲橋 **加藤病院**

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時
小田原海岸 毎月曜午前中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雑誌 合本 第壹巻

巻頭には便利なる目錄を添へ、製本は美麗高尚、クロースにて金文字入也。これを以て細君の文庫を飾るに宜しく、家庭間の贈答品としては更に宜し。新年の際若干を製本して、之を江湖に試みしに、思ひの外の高評を得て忽ちの内に賣切となれり。今度幸に數百册出來したれば、以て大方諸君子の渴を醫するに足らんか。

一册價金五十錢　郵稅金八錢

發行所　東京市新港町　由分社

婦人寶典

和紙摺（帙入）**全五冊**　頒美本紙數壹千參百頁　實價金參圓參拾錢　（小包郵稅金貳拾錢）

洋紙摺（總クロス金文字入）**全一冊**　紙數同上　實價金貳圓廿錢　（小包郵稅金貳拾錢）

●和裝黑塗箱入金參圓八拾錢　●洋裝黑塗箱入金貳圓七拾錢●

此書は小松宮頼子殿下の統べさせられ女學通信教授を以て世に名高き大日本女學會に於て多年蒐集されし所の女學に關する和漢洋の諸材料中より最も婦人に適切なる部分を拔萃したるものと新たに名家の起稿されたるものとを一書にまとめ以て婦人座右の良師友たらしめんが爲に編輯されしものにて殊は其中藝諸科目は孰れも專門大家の擔任に係り實に世に類なき婦人寶典なり其目次并に講述者左の如し

本文目次

●女子修身　女子高等師範學校教授　佐方靜子
●禮法　同上
●家庭教育　三輪田高等女學校長　三輪田女史
●家事衞生　帝國大學名譽教授　三宅秀
●看護　帝國大學教授醫學博士　吳秀三
●家事管理　女子高等師範學校教諭　後閑菊野子
●家事經濟　同　同上
●割烹　田邊和氣子
●裁縫　東京裁縫學校々長　渡邊辰五郎
●挿花、點茶　田邊和氣子
●作文　今泉定介
●作歌　御歌所寄人　坂正臣
●習字（附手本）　御歌所參候　大口鯛二
●畫學（附手本）　女子美術學校教授　武村千佐子

鼈頭目次

●音樂　明治音樂會幹事　東儀季治
●刺繡　共立女子職業學校刺繡主任教師　木村仲子
●造花　同造花主任教師　金子支江子
●編物　同編物主任教師　豐原繁尾子
●組絲　同　同
●兒童心理　日本女子大學教授　高島平三郎

挿畫

●上古天下平藤原鎌倉足利德川今代各婦人服裝彩色畫（村田丹陵筆）●光明皇后紫式部承香殿女御小大君平政子山內一豐夫人各筆跡寫眞●明治貴婦人筆跡寫眞●明治閨秀筆跡其他卷中挿畫數百個

●本書は內容の有益多趣なるのみならず外形をも高尙優美書裝飾せるものにて進物賞品等に極めて適當なり

●本書は各地特約書肆に發賣を託しあり御便宜の場所にて御購求を乞ふ

●本書の見本御入用の御方は往復はがきにて御申込次第進呈すべし

發行所　東京京橋區柳町五番地（電話本局三〇〇〇）　郁文社

發行所　大坂東區南本町四丁目（電話東三三八四）　積文社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA